医挑む

第1部 寿都から

⑦見えない壁

救急連携 島牧と亀裂

後志管内寿都町の隣町、島牧村の渡辺房男さん(82)は、朝7時発のバスに30分揺られて町立寿都診療所に来る。「ぜんそくを治してくれたこの診療所はワシのかかりつけだ」

搬送2人のみ

寿都診療所の外来患者の15%、年間延べ2500人は島牧村民だ。だが、急患になると、島牧村民を寿都に直接搬送したのは昨年、2人だけだった。

なぜなのか。

2005年、それまで両町村の急患を受け入れた道立寿都病院が財政難で廃止され、1次救急は各町村の責任になった。

ところが、島牧村の村立診療所は医師1人で救急対応は困難だった。代わりに寿都診療所が担い、その年、受け入れた急患の4割を島牧の患者が占めた。

島牧の重症患者を転送するにも、寿都の医師や看護師が付き添った。カルテもなく、検査がいちから必要な患者も多かった。「負担が重すぎる」。寿都診療所所長の中川貴史さん(34)は悩んだ。

これ以上島牧の救急を無償で受け入れ続けるのは難しい―。寿都町は、島牧村に財政的な負担を求める代わりに、島牧診療所の医師は寿都からの派遣で賄い、休日夜間の急患も寿都が診る新方式で理解を得ようとした。

島牧の急患を受け入れるなら、日常からしっかり診療することが家庭医の理想。中川さんらもそう思った。

しかし、意見はすれ違った。「村に常勤医がいなくなるうえ、寿都の赤字を穴埋めしてくれと言っているように映った」。島牧村の藤沢克村長(59)は、そう振り返る。

村民だけ対応

当時、寿都町には、道立病院廃止に伴う新施設の建設費や運営費など、9年間で約20億円の補助金が入ることになっていた。島牧村の感情は硬化した。

交渉は06年に決裂。島牧村は診療所の医師を2人に増やし、救急は村民だけを受け入れる異例の体制をつくった。島牧の急患は寿都から姿を消した代わりに、島牧村の出費は年間約3千万円増えた。

藤沢村長は「寿都町と協力したいという気持ちはあるが、すぐには難しい」という。両町村にとって交渉決裂は、いまも深い溝だ。

行政の枠という「見えない壁」で思うようにいかないジレンマ。

「地域の複雑な事情と理想がかみ合わないことも、ここに来て知った」。中川さんらの試練は続く。

携　自治体病院の連　道は2008年、「北海道自治体病院等広域化連携構想」を決定し、医師不足と赤字に悩む医療機関に対して、連携して機能を分担したり診療科を集約するよう求めた。中核病院のある30の圏域で協議を始めたが、各市町村にとっては地元医療機関の規模縮小・機能低下を招く可能性から反発も強く、実質的な連携や機能分担は進んでいない。

連載へのご感想をお寄せください。
▶Eメール iryou@hokkaido-np.co.jp
▶ファクス　011・210・5592